

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：15301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580147

研究課題名(和文)「島の暮らし＝場所にこだわる生き方」の今日的意味

研究課題名(英文)The meaning of the life in the island at the present time

研究代表者

北村 光二 (Kitamura, Koji)

岡山大学・社会文化科学研究科・特命教授

研究者番号：20161490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：近年日本では地域社会の消滅が喧伝されているが、島嶼社会ではもはや地域振興が問題になるというレベルにはなく、人々が島に暮らし続けるということ自体が現実的に対処すべき課題として自覚されるところにきている。人々は日々の具体的課題への取り組みを行って自らの生存を確保しようとしつつ、それが地域社会の存続を確保するものになっているかを繰り返し反省している。彼らはそのような取り組みにおいて、そのときの課題に関わる思考やコミュニケーションを駆動する手がかりとなる彼らどうしの 身体的共存・共感という状態や集合的記憶などに対する鋭敏な準備状態にあるのだと考えられた。

研究成果の概要(英文)：At the present time in Japan, people in the island societies tackle the subject whether they can by themselves continue to live in their island or not. When they cope with the problem at hand and try to secure their own lives, they also repeatedly reflect whether they secure the continuance of the regional society or not. They are sensitively ready to be concerned in the co-presence and the sympathy with each others or collective memories and so on, which are the clues to drive their own thinking and communication.

研究分野：文化人類学

キーワード：島嶼社会 地域社会の消滅 主体的選択 身体的共存・共感 集合的記憶 相互行為 コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は、アフリカの乾燥地帯に暮らす狩猟採集民や牧畜民の生態人類学的研究を蓄積してきた。彼らは、不確実性の高い自然環境下での生存を確保するために、同じ条件を背負う仲間たちとの間に、対等で臨機応変な協力関係を可能にする社会体制を作り上げていた。そして、その後の瀬戸内海やオセアニアの調査から、島嶼社会が同様の不確実性の高い自然環境に直接向き合って生存を確保しつつ類似の社会体制を維持していることが明らかになった。

(2) 島嶼社会は、もともと狭小な土地と貧弱な資源というハンディキャップを抱えているが、近年のグローバル化の進展のもとで外部世界への依存の増大と伝統的な地域共同体の弱体化という後戻りのできない変化に晒されている。それと同時に、日本では近年、地域社会の消滅が喧伝され、官民挙げて地域振興に躍起であるが、島嶼社会ではもはや何らかの打開策を打ち出すというレベルとは区別すべき地点にいる。このような状況において、地域社会の消滅という極限的事態を何とか回避しようとするとき、人びとはどのような選択を行うべきなのかについて具体的に検討しなければならないと考えた。

2. 研究の目的

島嶼社会は、もともと、修正不可能なさまざまなハンディキャップを抱えながらも、その地域に根を張った暮らしを維持してきたが、近年のグローバル化の進展の中で、外部世界への依存の拡大と地域共同体の弱体化に伴う歯止めのない人口流出に直面している。したがって、島民たちにとって、自分が生まれ育った島から出て別の場所で暮らすことは少しも特別な選択ではなくなっているのであり、逆に言えば、島に残ることは、島の地域社会をこれから先も存続し続けるものにしようとするという覚悟のもとで主

体的に選択することになるのだと考えられるのである。

その際、地域的なまとまりを保ちつつ、持続可能性という展望を確保するために何が必要になるかについて、周囲の自然環境との関係のあり方と、同じ場所に居合わせる人びとの間に作り出される社会システムのあり方の二つの側面を区別しながら、具体的なエピソードにもとづく検討を行う。

外部世界への依存の拡大に関しては、それが周囲の自然環境との関係そのものの重要性が低下するということを意味するというよりは、関係のあり方として、生き続けるために不可避の活動という性格のものが減少し、そこにある何に注目してどんな関係を結ぶのかという選択の余地のある活動の比重が大きくなることに対応すると考えられる。一方、地域共同体の弱体化とは、固定的な個人間の役割関係や、権利・義務関係にもとづく組織的な意思決定や組織的対処が難しくなり、むしろ、「同じ場所に居合わせていること」それ自体を手がかりにする「相互行為システム」のコミュニケーションにもとづく地域的まとまりの重要性が高まることに対応すると考えられる。

ここでは、地域に根を張った生き方の二つの側面として、その地域にある自然環境との関係のあり方と、同じ地域に暮らす人びとの活動の交差が生み出す社会システムのあり方の二つを区別するが、その上で、そのそれぞれについて、行き続ける上で望ましい結果を実現しようとする活動と、それらの活動の安定的再生産を可能にするより大きなシステムの秩序を確保するという活動があるのだと考えた。そのような前提のもとで、本研究では、日々の活動を安定的に再生産することに対応する生活の持続可能性の確保と同じ場所に居合わせる人々の社会的まとまりの確保への適切な配慮を備えた新しい生き方を見出すことを目的と

して設定した。

3. 研究の方法

以下の項目についての現地調査を、ミクロネシアのヤップ島と、日本各地の島嶼社会において行い、それらについての比較にもとづいて類型化して理解を深める。

(1) 周囲の自然環境との関係を作り出す活動

生業構造の歴史的変遷に関わる事実の集積

今日的状況におけるさまざまな「資源」とその利用の実態

自然環境との持続的共存関係の向けての活動の実態

(2) 島民どうしの間に作り出される社会システムのあり方

同じ島に暮らす者どうしの関わりという最も基本的な「共在的关系」を維持する活動

具体的問題に直面したときの協調関係を作り出す活動

集合的記憶や集団のアイデンティティを手がかりとする多くの島民を巻き込む活動

4. 研究成果

本研究では、歯止めのない人口流出に直面しながらも何とか地域社会のまとまりを維持しようとしている日本の島嶼社会がどのような選択を行おうとしているのかについて、現状と課題を明らかにしようとした。

(1) 多くの島嶼社会では、地域社会の消滅という極限的事態を回避することが対処すべき課題なのだと思われているのだとしても、もはや何らかの打開策を見出すというレベルの対応が期待されているわけではない。すなわち、島民たちにとっては、「島に暮らし続ける」ということそれ自体が現実的課題として自覚されるようになっていて、日々の具体的課題に取り組みながら、そのと

きの選択が自らの生存を確保するものになるというだけではなく、地域社会の存続を確保するものにもなっているかを繰り返し考えてしまうことになっている。

(2) 島民たちは、地域社会の存続のための対策を具体的に考えたりコミュニケーションしたりしているのではなく、自らを、そのような課題に関わる思考やコミュニケーションを駆動する手がかりになる彼らどうしの「身体的共在・共感」や「集合的記憶」、「誇りや自尊の感覚」に対する鋭敏な準備状態に置くことによって、実際にそのような思考やコミュニケーションを再生産しようとしているということである。

(3) 伝統行事や伝統芸能、地域の自然資源等を利用した観光客誘致の活動も、決してたんなる観光事業の収入を目指す経済活動ではなく、「地域社会の存続」という課題への彼ら自身の思考やコミュニケーションを活性化し、再生産しようとする活動そのものにもなっているのだと考えられる。

(4) 岡山県白石島では、かつて島民の誰もが踊れた盆踊りであった「白石踊り」が、今やお盆の時期の観光の目玉になるとともに、外部から高く評価される文化財として「白石島の誇り」と島民自身に意識されるものになっている。その一方で、過疎化や島民の踊り離れからその継承にはさまざまな困難が立ちだかっているが、そのような継承の危機に際してそのあるべき姿を意識して試行錯誤を繰り返しつつ、この伝統行事の継承を「地域社会の存続」に向かう動きにつなげようとしているのだと考えられる。

(5) 東京都の八丈島にとっての「流人の島」という歴史的記憶は、八丈町の公式のパンフレットでは決して大きく取り上げられることはなく、また島民自身も外部の人に進んで話すような話題ではないと考えられる。にもかかわらず、八丈島の流人第1号とされる宇喜田秀家が作った岡山城の築城400年祭が

2016年に岡山で開催された際に、島の芸能を演じる一団が大挙して出演していた。これは、観光客の誘致という側面を持つ活動であったことは確かだとしても、それと同時に、島民自身にとってのアイデンティティの確認という意味を持つ活動であったと考えられるはずである。

このような活動において、人びとは、同じ場所に暮らす人間のまとまりにとっての「身体的共在・共感」の関係や集合的記憶、誇りや自尊の感覚それ自体についての思考やコミュニケーションを繰り返し再生産することによって、それぞれの場所における仲間との暮らしを持続可能なものにしようとしているかのようなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

北村光二、島に暮らす人びとが大切にしていること - 岡山県白石島の事例から、文化共生学研究(岡山大学大学院社会文化科学研究科)、査読無、13号、2014, 43 - 60.

[学会発表](計0件)

[図書](計3件)

Kaori Kawai, Koji Kitamura et al. Kyoto University Press, Institutions: The Evolution of Human Sociality, 2017, 461

河合香吏、北村光二 他、京都大学学術出版会、他者 - 人類社会の進化、2016、454

木村大治、北村光二 他、ナカニシヤ出版、動物と出会う : 心と社会の生成、2015、174

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 光二 (KITAMURA Koji)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・特命教授

研究者番号 : 20161490